

■実力派クリエイター陣からの推薦コメント、全文掲載！

『スワンプマン芦屋沼雄(暫定)の選択』は、「意識の連続性を遮断する装置」を使用され、当人の身体と記憶を残したまま別人になってしまった高校生の物語である。

「意識の連続性」というのは有史以来の哲学者が擦りまくっている問題であり、大抵の方が人生のどこかの段階（おそらく中高時代）に考えたことがあるはずだが、物語のテーマとしてはかなり使い勝手が悪い。身体や記憶が入れ替わる話と違って外部からわかる影響が何もないので、「それは個人の考え方しだいですね」で話が終わってしまうからだ。

ところが本作では、いくつかの超常現象的なギミックを用いることで、この意識の問題をきちんとストーリーに乗せてくる。主人公の使う「芦屋流陰陽術」をはじめとする数々の異能者が、人間の意識やそれに付随する「魂」にアクセスする手段を提供し、またこうした異能者たちを統括する「機関」と呼ばれる組織が、そうした意識の遮断に対する法制度を整備している。そういう世界観を作ることで、意識の連続性という扱いづらい哲学問題を、物語上の実際的な問題と結びつけることに成功している。

本作はこの「意識の連続性を遮断する装置」の行方を追い、異能バトルを繰り広げ、幼馴染との恋愛なども絡めつつ展開していく。異様な運命に巻き込まれながらも、きちんと現実の高校生として生きようとしているところに好感が持てる。搜索の最中にも中間試験の勉強をしたり、バイクに乗るときに運転免許を気にするところが可愛らしい。

印象的だったのは「意識を遮断された」という事実に対する主人公の態度だ。装置の機能を説明されたあとで「自分は別人になった」ということをやけにあっさり受け入れ、それに応じて「沼雄」という新しい名前を自分につけてしまう。遮断される前の自分に対して「幼馴染の好意に最後まで応えることの出来なかった珠雄は本当に不義理な奴だった」と他人事のように言うし、別人である以上は幼馴染と付き合うべきではないと思っている。この割り切りの良さに読んでいてかなりの違和感があったが（作中の「機関」でもここは意見が分かれるらしい）、そうした価値観の相違もこの物語が包括する面白さのひとつなので、あわせて楽しんでいきたい。

柞刈湯葉（『横浜駅 SF』『人間たちの話』）

あまりにも斬新な殺人（人？）と、そこからはじまる犯人、というか被害者？ 探し。ギミックを成り立たせるために現代を広げた世界観は SF ファンタジーひときじホラーを内包し、味のあるキャラクター達を導線としてみすてり……ミステリーへと突き進みます。バトルもあるよ！ みんな好きだろこういうの！ 私も好きだ！ と叫びたいのを隠したい多感な少年少女を心に宿している方にはとくに突き刺さるでしょうスワンプマンという概念は、その哲学きゆえにともしれば人を選ぶ題材に思われるかもしれませんが、だいじょうぶ、これはいつでもどこでも普遍たる「自分探し」の物語。万人に通ずるテーマであり、選ばれていようがいまいが読後には、自分だったらどうするか——「自身の選択」を

見つめ直すことになるでしょう。あるいは「よくもこんなの読ませてくれた」という気持ちになるかもしれません。少なくとも読了後すぐの私はいま、こんなの自分で書きたかったよ！ とネタの奔流にのまれています。

スワンプマンからはじまる可能性、楽しませていただきました。

楽しませていただきましたよ！ くやしいけどね！

うえお久光（『紫色のクオリア』『悪魔のミカタ』）

“わたし”って何？ 意識をめぐる思考実験から、とんでもない物語の幕が上がる。

ミステリーでファンタジーでSFで哲学な、いまだかつてないライトノベル。

大森望（『21世紀SF1000』『三体』『NOVA』）

これは解放の物語である。ただし本編中でそのことについては一切言及されない。自己同一性など無意味なのではないか。人間は成長しなければならない、だから自我を確立しなければといった〈正しさ〉など、どうしてもいい幻想に過ぎないのではないか、その自己実現プレッシャーからの解放。しかしその先には何もない。自我の確たる証明さえも他人頼りで、永遠に合格通知の来ない受験勉強をただ続けるだけの、人生という監獄があるだけで、いつどんな議会で誰に決められたのかさえわからない法律がいつの間にか超自然的な出来事も含むすべてを規制してしまっているが、それにも反論は特にない。吸血鬼が出てこようが世の常識にはさしたる影響もなく、陰陽師の秘術でさえ限界があり、おのおの世界観という檻に閉じ込められている。運命の女神も善悪を無視して救済を拒絶するし、唯物論を完全否定する魂の実存すら、それが存在しようがしまいが大差ない虚無感が全体を覆っていて、自分を無条件に慕ってくれる幼馴染みがいても、自我の安定を保証してくれる訳でもなく、献身的で見返りを求めない親友も生きる理由は教えてくれず、未来が予知できるとしても、そこに限られた制約を強引に当てはめずにはおれない無力感から逃れることはできず、メタ的に『第一話』と『第二話』が戦っても、どちらも正解には辿り着けないねじれきった挫折感だけが明確にある。DCコミックスの『サーガ・オブ・ザ・スワンプシング』の設定を借りての思考実験を行った哲学者の、さらにそれを援用するところから生まれた、何重にも屈折した物語の中からどんな〈答え〉を選択するかは、読者たるあなたに掛かっている。ちなみに一上言及された諸々は作中にすべて登場する。いや喩えて、とかじゃなくて本当に全部出てくるんだってば。

上遠野浩平（『ブギーポップ』シリーズ）

「スワンプマン」と聞いて、哲学系の難しい話なのかしら……！と身構えていましたが、アクションあり、ラブコメありで、とても楽しく拝読させていただきました！

自分は一体何者なのか。これからどう生きていけばいいのか。迷いながらも進んでゆく沼雄（暫定）の選ぶ道をこれからも見届けたいです！

来栖夏芽（『人外教室の人間嫌い教師』）

この作品は、多分SFとオカルトとミステリと論理と冒険と青春のカオスだ。どうなるのか、どういうことなのか、読み始めてほどなく、読み進めてますます、気になるところが多すぎて、しかもだんだん増えてゆく。我々はろくでもない予感を頭の片隅に置きながら、主人公と共に先へ先へと進んでゆく。

最終選考で落ち、いわば一度死んだのに、何故か生きてここにいる。この作者と私はスワンプマンだ。死（選外）にはもちろん理由があるが、しかし死してなお存在が続くには、それを上回る奇妙な理由（魅力）がある。私は同族としてそれを保証する。

甲田学人（『ほうかごがかり』『Missing』『断章のグリム』）

古典的なスワンプマン問題にこういう解釈が可能だとは想像もつかなかった。沼雄（暫定）が落ちた意識と存在の迷路はどこに向かうのか。続刊が楽しみでならない——というような堅苦しい話はさておき、ちょっと七瀬が可愛すぎませんか。

三枝零一（『ウィザーズ・ブレイン』）

本作品を読んでいる間、あなたは現実を薄皮一枚剥がした下にある、精巧な悪夢の世界に迷い込んでしまったような、不思議な酩酊感に襲われ続けることになるだろう。語り口は王道のエンタメなのだけれど、主人公（スワンプマン）の設定に仕掛けがあって、読者は常に問われ続けることになる。あなたは何者なのか？ あなたは本当にあなたなのか？ フィリップ・K・ディックをはじめ、古今のSF作家が描いてきたテーマだが、本作品はそれに真正面から挑み、ライトノベルの新たな可能性を切り拓いてくれている。

志瑞祐（『聖剣学院の魔剣使い』）

「これはラノベじゃなくてSF小説だ」

この小説を読んだときの、というより読み始めた瞬間の感想である。

ラノベとSF小説にどんな違いがあるかという、それは覚悟だと思う。

ラノベというのは、良くも悪くも軽く読めるところに特徴があると思うのだが、この作品は違う。何しろいきなり、「自己の同一性とは何ぞや？」という哲学的な話を、サイエンスフィクションにしてぶん殴ってくるのだ。

これを呑み込めるかどうかで、物語の没入感はまったく異なる。もっと言えば、「スワンプマンって同一人物では？」という立場にたって読んでしまうと、「主人公は何を一生懸命やっているんだろう？」とってしまうかもしれない。

だから覚悟が必要なのだ。これはSFで、ちょっと難しい設定を受け入れて、それを楽しむという覚悟が。

その覚悟さえあれば、この物語は面白い。物語は淡々としかしテンポ良く進み、個性的な

登場人物たちの軽妙なやり取りが楽しい。SFとオカルトが混ざりあう設定は興味深く、話もよく練られている。必要なのはちょっとした覚悟だけ。

ラノベとして気楽には勧められないけど、是非読んでみて欲しいと思える一作だ。

駄犬 (『誰が勇者を殺したか』)

思考実験に次ぐ思考実験。哲学に次ぐ哲学。SFにオカルトに異能バトル。そこへ美少女との恋愛をひとつまみすれば、「ページを捲るたびにワクワクするライトノベル」の出来上がりです。

二転三転しながら謎を追いつけていくシナリオに、思わず自分の童心が目覚めていく。僕らは教科書代わりに、ライトノベルや美少女ゲームから知識を学んでいく。本書の物語は、そんな読者たちの脳味噌を刺激するフィロソフィーで溢れている。

スワンプマン。同一性。死んだ自分がそのまま生き返ったら、それは変わらず自分と言い切れるか。残念ながら、まだ現実世界において答えは用意されていない。幸運なことに、そんな非人道的な実験は行われていないのだから。いや、ひょっとすると本書の物語のように、僕ら一般人には与り知らぬところで既に……。こうして不確定な妄想を広げていくのが思考実験であり、そこへ物語を加えることで作品となる。

本書は壮大な思考実験の塊です。

妄想こそがライトノベルです。

良い本を読むと、読者の妄想も広がっていく。

文字を追うたび、悔しいくらいに同一性について考えさせられる。妄想を促されてしまう。本書にはその力がある。

にやるら (『NEEDY GIRL OVERDOSE』)

これは、境界線を歩く物語だ。

生と死の境目。意識と無意識の境目。

虚と実の境目。恢復と喪失の境目。

日常と非日常の境目。人格と魂の境目。

感情と理論の境目。倫理と論理の境目。

有情と無情の境目。悲劇と喜劇の境目——。

歩いていけばいつか、境界線を踏み越えることになる。一度踏み越えてしまえば取り返しはつかなくて、反対側へは二度と行けない。

なのに、物語は霧の中にある。わからないのだ。一ページの先がどちらに転ぶのか、あるいは踏み越えないのか——踏み越えずに済むのが。

それでも読み進めなければならないし、だからこそ読み進めたい。

これは、境界線に佇み、己を見定めるための物語だ。

藤原 祐 (『母をたずねて、異世界に。』 『レジンキャストミルク』)

MF文庫Jの単行本に新作が登場です！

「異世界ファンタジー？」「いいえ、違います」

「現代ラブコメですか？」「それも、違います」

なんと『伝奇ミステリー』作品でございます！

濃厚な会話劇は読み応えも抜群。「デカルト」「哲学的ゾンビ」「ウィグナーの友人」「チューリングテスト」「ラプラスの悪魔」などなど。こういったワードにピンと来た方には特にオススメです！

ぶんころり（『佐々木とピーちゃん』）

圧倒的な筆力と先を読ませる物語の吸引力を兼ね備えた、珠玉の現代異能奇譚でした。自分でも本物か偽物かもわからない曖昧な存在と化してしまった主人公の正体を究明していくという強固な軸を持ちながら、SF・青春・異能といった、ありとあらゆる要素が矛盾なく、いや、それどころか心地よく絡み合い、特別な読書体験をもたらしてくれます。この作品の世界観は「ありそう」と思えるぐらい地に足がついていて、それでいて「なさそう」なことのオンパレードでもあるという、実在感とフィクションの狭間に位置しています。脇を固める登場人物たちも、絶妙に「いそう」と「いなさそう」の境界にいる感じで、個人的に最も魅力的に思える存在感でした。それゆえに読んでいる私も、スワンプマン自身の悩みが真に迫ったものを感じられたし、謎の行く末に強い興味を持つに至りました。

「面白い」のは大前提、「エモい」だけじゃ満足できなくなってきた、そんな人にオススメな「興味深い」読書体験の急先鋒。ぜひ、皆さんも堪能してみてください。

三河ごーすと（『義妹生活』）

「スワンプマン」という奇妙な思考実験のアレンジバージョンとして作られた本作は、超常現象や異能バトル、控え目な主人公と、寄り添う美少女、というライトノベル定食大盛りのような内容にもかかわらず、絶妙な不穏さが常につきまとう不思議な作品です。そのアンバランスさこそが、沼に引きずり込む為の罠なのかもしれません。

ヨコオタロウ（『ニア オートマタ』）